# 医療功労賞2人喜び

## 奥三河リハビリ会 尽力

長年にわたって地域の医療活動に貢献した人に贈られる「第49回医療功労賞」(読売新聞社主催、厚生労働省、日本テレビ放送網後援、損保ジャパン、アインホールディングス協賛)の県受賞者に、豊田市の理学療法士青山賢治さん(64)と、名古屋市東区の柔道整復師山田泰嗣さん(76)が選ばれた。2人に受賞の喜びの声を聞いた。

理学療法士
**青山賢治さん 64**

過疎化が進む奥三河地方の山間部で、お年寄りの体力維持や、病後のリハビリ、生活相談などに取り組んできた。理学療法士としての仕事だけでなく、地域の保健師や作業療法士、言語聴覚士ら機能維持、回復訓練に関与する医療職らに声をかけ、「奥三河リハビリテーション会」の設立に奔走し、リハビリ医療だけでなく、介護福祉的な支援態勢作りにも大きく貢献したことが認められた。

理学療法士の道に進んだのは、高校3年への進級を控えた春、オートバイに乗っていて車にはねられた交通事故がきっかけだった。左足に大けがを負い、入院生活は1年に及んだ。「気分が沈みがちになる中、愛知医科大から派遣されていた理学療法士の方に励まされ、リハビリを続けることができた。私もこんな仕事に就けたらと思った」。けがで留年し、4年をかけて高校を卒業後、迷わず理学療法士の専門学校に入った。資格を取得すると、自身が事故で入院した県厚生連足助病院を就職先に選んだ。

「就職したころはまだ、介護保険制度もなく、地域のお年寄りのみなさんが寝たきりにならないようADL(日常生活動作)の維持、改善に取り組んできました」と当時を振り返る。

昨年9月末、足助病院、厚生連加茂病院、新城市の西新町整形外科と、40年に及んだ病院勤務からいったん退いた。「少しゆっくりしたら、今度は体力維持などの知識を活用して、地域のお役に立ちたい」と笑顔で話した。